

はしがき

「伊勢・志摩・伊賀の戦国史」といった時、多くの方はどのような内容を想起されるだろうか。

戦国時代の伊勢神宮の様相、志摩の海賊と九鬼嘉隆の活躍、そしてもちろん伊賀忍者たちの暗躍などを期待される人も多いだろう。もちろんそれら一つひとつのテーマはとても重要で、かつ興味深いものばかりだが、いずれも戦国時代の伊勢国・志摩国・伊賀国、すなわち現在の三重県域全体を覆うテーマとはなりたい。

そもそも古代以来、現在の三重県域は伊勢・志摩・伊賀そして紀伊の東部という四つの令制国からなり、なかでも伊勢国は伊勢神宮領である神郡とそれ以外の非神郡に分かれていた。江戸時代に至っては北から長島藩・桑名藩・菰野藩・神戸藩・亀山藩・津藩・久居藩・鳥羽藩などが乱立する他に、天領（幕府直轄領）や伊勢神宮領などが混在し、松阪から南の紀伊半島南部はほぼ紀州藩という「まとまり」のなさである。

本書が対象とする中世後期の三重県域も、北勢地域と志摩・東紀州地域は伊勢守護領、中勢地域には関氏・長野氏と伊勢国司北畠氏が盤踞し、伊勢市周辺は伊勢神宮領、伊賀地域は伊賀守護領という群雄割拠状態であった。しかし戦国時代になると、次第に伊勢国司北畠氏が伊勢守護を併任するようになり、また宇治・山田合戦などを契機に伊勢神宮領にも介入する。さらに戦国時代を通じ、志摩・東紀州地域と伊賀地域南部にもその勢力を伸ばしていき、戦国末期に北畠具教の子具藤が、永年の宿敵長野氏の養子となることで、現三重県域はほぼ北畠氏の傘下となった。前近代の三重県域に、これほど広範囲の「まとまり」をもたらした権力体は他にない。

前近代の三重県域をほぼまとめて論じ得る唯一のテーマは伊勢国司北畠氏と言える。

「実はそれ、ぜんぶ三重なんです！」

伊勢神宮や高田本山専修寺、伊賀の忍者や志摩の海女漁など、実に多彩な魅力を有しながら、全体としては「まとまり」がないとされる三重県を、全国にアピールしようというかつて展開されたこの三重県観光キャンペーンの聲に倣うならば、いま次のように言えようか。

「実はそれ、ぜんぶ北畠なんです！」

本書ではそのような問題意識から、北畠教具（一四二三～七一）・政郷（政勝・逸方）（一四四九～一五〇八）・材親（具方）（一四六八～一五一八）・晴具（具国・天祐）（一五〇三～一六三三）・具教（一五二八～一七六六）・具房（一五四七～一五八〇）・具豊（織田信雄）（一五五八～一六三〇）という七代の国司を中心に、伊勢・志摩・伊賀の戦国時代を叙述していると思う。